

感性的コミュニケーションとしての舞踊

(司会) 原田 純子

誰かと一緒に踊るとき、「とても気持ちよく踊れた」と感じることもある。それぞれが勝手に動いていても、踊る者たちの間にはいつしか通じ合うものが生まれ、響き合い、やがてひとつの世界ができあがる。あるいは、お互いを感じながら動き、「息がピッタリ合った」ときは、動きは動きとしてのみならず、生きたコミュニケーションの場を出現させる。だがそもそも、踊りの中でお互いに「通じ合う」とか、「息がピッタリ合う」というのは一体どういうことであろうか。

ここで、シンポジウムに先立ち基調講演をいただいた鯨岡峻氏(京都大学)のいう「感性的コミュニケーション」に着目したい。氏は発達心理学の立場から、ことばを発する以前の子どもと母親の二者関係の研究より「感性的コミュニケーション」という概念を導き、それが生じる際の身体のあり様について、独自の論を展開されている。つまり我々のコミュニケーションは、身体が感受し感応することによって情動を共有する、あるいは分かち合うという感性的なものをベースにしていると鯨岡氏はいう。本講演では、この感性的コミュニケーションを考えるにあたり、そこでの身体のあり方―間身体性の問題について詳しくお話いただいた。

シンポジウムでは、舞踊の踊り手同士、あるいは創り手と踊り手、踊り手と観客などの間に生ずるコミュニケーションに焦点をあて、様々な舞踊活動におけるコミュニケーションの実際を捉えるとともに、このような舞踊の体験が我々人間の成長に、あるいは生き様にどのような影響を与えうるかを考えることを目的とした。

以下、立場の異なる3氏の報告である。

木村百合子氏(舞踊家)は、ニューヨークのMartha Graham Dance Companyで20数年間、主役ダンサーとして踊った自らの「表現体」としての体験をお話くださった。20世紀の偉大なる舞踊家であり振付家であるMartha Grahamとのコラボレーションの過程は、プロの舞踊家として垂直方向の高みに登りつめた、木村氏に固有の貴重な体験である。レパートリー作品と新作の立ち上げに際して、それぞれの過程におけるMartha Grahamとのコミュニケーションは、話を聞いただけでも緊張感に満ち、鬼気迫るものを感じずにはいられなかった。佐分利育代氏(鳥取大学)には、聾学校・盲学校における障害児の身体表現活動から、記録ビデオ

の映像を交えてお話いただいた。視(聴)覚障害を持った子どもたちは、他者に対して、動きでメッセージを伝えたいという思いが強く、たくさんのイメージを持った彼らの表現は、対象の本質を的確に捉えていることが多いという。音楽が聞こえなくても仲間と一緒にリズムカルに踊ることができるという聴覚障害の子どもたちには、踊りの中で他者と交わすコミュニケーションが目に見えているのではないだろうか―そのようなことを感じるほど、彼らの踊りは温かく豊かな交流の空間を生み出していた。

西洋子氏(東洋英和女学院大学)は、ご自身が指導されるグループの活動のビデオ映像を通して、インクルーシブなダンスにおけるコミュニケーションの実際を示してくださった。「インクルーシブ」という言葉は「すべてを包み込む」、すなわち年齢や性別、障害の有無、ダンスの経験の有無等にかかわらず、皆一緒にという意味であり、それぞれの異なる個が交流しあうからこそ生まれる表現活動であるという。そこでのコミュニケーションは、双方向性だけでなく、お互いに影響しあい響きあって、膨らみを持つものとなっていた。ディスカッションでは、舞踊におけるコミュニケーションあるいは舞踊そのものを記録(記述)する難しさ、そして舞踊の「何を」記録するのかという問題にも言が及んだ。とくに木村氏が慎重に言葉を選んで話を進められる点に、舞踊を言葉に置き換えて表わすことの難しさを考えさせられた。

舞踊はまさに「感性的コミュニケーション」である。個が「個らしく」自己を表現するとき、他者と通じ合う舞踊の世界、気持ちよく踊れる実感が生まれる。西氏のビデオで「皆と一緒に踊ること自体が楽しい」と嬉しそうに話す少女の言葉に、舞踊がいかに様々な個性の交流を可能にし、そこに生まれるコミュニケーションが、それぞれの個を豊かに育むかを見た気がした。